防災教育を中心とした実践的安全教育の充実に向けた取組について
― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

42 長野市立緑ヶ丘小学校

1 はじめに

本校は、標高約 345m、長野市の中心部に位置し、南から東側を犀川が流れている。国道 18 号線に沿って細長く伸びた学区の中心を、国道 58 号が東西方向に走っている。児童数は 650 名、職員数は 38 名、児童は集団による登下校を行っている。学校周辺は住宅地が広がり、校門までの道路では時間指定で進入が規制されるといった交通事情である。

2 本校の防災体制について（概要）

(1) 危機管理マニュアル

学校における危機管理としてマニュアルを作成し、年度当初に読み合わせを行っている。マニュアルは全職員にファイルに綴じて配布し、いつでも確認できると共に更新した場合は、すぐに差し替えることができるようにしている。

(2) 避難訓練の実施内容

５月、８月、10 月の年３回避難訓練を実施している。校庭までの避難経路に関して、立地条件から２つのコースを設定している。

① ４月･･･火災を想定した避難訓練。（プール横を通った避難経路や避難方法の確認）

② ８月･･･地震発生による火災発生を想定した避難訓練。
道路を通った避難経路や方法の確認。

③ 10 月･･･休み時間の火災を想定した避難訓練（児童への事前連絡を行わない）

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザーの要請にあたって

本校の校舎配置は、校庭と校舎の間にプールと体育館があり、校庭への避難経路がこの間の通路を通らなければならない。また、昨年度体育館の飛散防止対策が終わった。地震を含む災害が各地で起こっている現在、今までの避難の仕方や校内の安全環境整備について十分であるのかという声が職員からも挙がった。そこで、職員のさらなる意識高揚と、現在の安全環境整備への専門的アドバイスを受ける機会を求めた。

(2)　学校防災アドバイザーからのアドバイス

① 第１回

危機管理マニュアル、第１回避難訓練計画とその反省、第２回避難訓練計画、校舎内についてアドバイスを受けた。

ア 地震を想定した避難訓練では、訓練用の予報はメリットがあるか。

イ 地震のみの訓練では、校舎外に出ることはほとんどない。想定外の出来事が起きた時校舎外に出る。想定外の判断をどうするか考えておく。

ウ 地震の際は裸足をやめる。飛散防止フィルムは、校舎全部に貼りたい。

エ 出火があった場合、第一発見者、初期消火が大切である。

オ 指示系統が重要である。

カ 安否確認を正確に行う。

キ 放送設備が使用不能になった場合、校庭に集合するなどして、全員の安否確認を確実に行う。

ク 休日の場合、どこに避難するのか各家庭で相談しておくことも大切である。

ケ 引き渡し訓練。教室での引き渡しを行っているが、校庭などでの引き渡しを訓練することも必要ではないか。

② 第２回　職員への講演

東日本大震災に関する映像、資料をもとに、講演をしていただいた。

(職員の感想)

ア 災害時における学校の果たす役割の大きさを感じた。

イ 災害発生時的確に判断するために、普段の管理体制マニュアルを見直し、更新するべきは更新することを定期的に行っていく必要がある。

ウ 避難訓練の際、教師と児童が今まで以上に実際の災害を想定し、真剣に行っていく必要がある。など

③ 第３回　避難訓練

ア 全体的には良い。

イ 休み時間の訓練にしては、子どもたちは放送をよく聞き、よくやっていた。避難時には絶対に話さないことをさらに徹底していく。

ウ 第一発見者は、初期消火をしなくてはならない。消火ができれば避難する必要は無くなる。避難することは、校舎を放棄することである。

エ 第一発見者が初期消火を行うとともに、指揮系統にどう伝えるか明確にすることで、できるだけ速い判断がなされる。

オ そこから先は、今回の訓練通りで良い。

カ 追い出しをきちんとすることが大切である。避難完了を確認した教室には○印を付

けることで、避難後は絶対に戻らないことが早く徹底できる。

キ 誰かがいなかったら探しに行くことはしてはいけない。そのための分担であり、特にトイレ、保健室にいる児童については気を付けたい。

(3) 学校として取り組んだ内容

① 避難訓練の見直し

今年度の避難訓練は終わっているが、来年度に向けて係で検討を進める。内容は、以下の通りである。

ア 避難経路の見直し。

イ 実践的な想定内容にシフトする。(地震速報、防火扉、停電、放送機器の不使用などを想定する)

ウ 避難所開設時の使用教室準備など。

② 休日、登下校時の安全

ア 学区が広く、緊急避難場所が複数となる家庭も多い。各家庭で、緊急時にどこに避難し、迎えを待てばいいのか日頃から話題にしてもらえるよう発信していく。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 本校の実態に合わせ専門的な立場からアドバイスしていただき、これまでの良い点、課題となることが明らかになった。課題解決の方法も示唆していただいた。予算も関わってくることもあるので、年度ごとに目標を設定し、取り組んでいくと良いこともアドバイスしていただけた。

(2) 日常の指導の中で、災害時に大切になってくる事柄が明確になった。避難時には絶対に話さない、放送は静かに座って聞くことなど、徹底することが安全を確保する上で大切であることがわかった。

(3) 長野市のハザードマップを再度確認したり、２つの避難コースが本当に安全なのかを、話し合ったりするなど職員の意識が高まった。

(4) 学校の立地条件から、校庭に避難するよりも、直近の神社などに避難することも考えると、地域に協力を仰ぐ必要もある。

5 まとめ

アドバイザーである榊原先生には、危機管理マニュアル、避難訓練実施計画、校舎内の安全点検、実際の避難訓練の様子からご指導いただくことができた。これにより、何より職員の防災、安全教育に対する意識が高まったことが、一番の成果である。今後、少しずつでもより現実的な状況を想定した危機管理を行っていきたい。

避難訓練の計画、実施にあたっては、毎回の立案、実施、反省をより実践的、現実的になるように心がけ、危機管理マニュアルは年度当初の確認だけでなく、定期的に確認、点検することの重要性を改めて知ることができた。

（　文責　教頭　塩原孝茂　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について
― 地域と連携し児童自ら考え行動することに重点をおいた防災教育 ―

43 長野市立信里小学校

１ はじめに

本校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹を通る県道の峠に位置し、児童数 49 名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる恵まれた環境にある。農業が盛んで、野菜やりんごの栽培の他に、400 を超える溜め池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことでも知られ、現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害の特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜め池も潜在的な危険である。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なくなかったり等、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

２ 本校の防災教育について

本校は、本支援事業の指定を受け４年目となる。学校防災アドバイザーの指導の下、過去３年間、緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練や、地域と共に学ぶ防災安全教室、電子地図による防災行動マップづくりを行ってきた。これらの実践が認められ、平成 27 年８月には「長野県学校安全表彰」平成 28 年 10 月には「文部科学大臣表彰・学校保健及び学校安全全国表彰」を受賞した。今年度は、自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した取り組みをめざし、防災安全学習のカリキュラムの構築を進めている。

【平成 29 年度の取り組み】

(1) 地域と連携して行う避難訓練
- ①基本の避難経路確認（緊急地震速報受信システムの利用）
- ②休み時間の避難訓練（集合場所への予備訓練・篠ノ井消防署第五分団による指導）
- ③信里子どもプラザと合同訓練
- ④不審者対応（信里駐在所警察官による不審者役及び児童への指導・非常階段から不審者侵入を想定した職員対応訓練）
- ⑤児童引き渡し（危害獣出没想定・保護者への緊急時メール配信及び児童引き渡し手続き訓練）
- ⑥青池保育園との合同訓練

(2) 講演会「気象災害から命を守る」防災安全教室③
講師　長野地方気象台次長　上野忠良さん　防災業務係長　髙橋恵美子さん
・区長会（防災会）と共催

(3) 災害時の避難行動を考える地域学習　→防災行動マップの更新、活用
・区長会と共催　・地域委員会、民生委員、学校ボランティアの協力

(4) ５カ年計画の修正　→５カ年を１サイクルとした信里小防災安全学習計画作成

３　信里子どもプラザと合同の避難訓練　７月 13 日（木）６校時（15:10～15:35）

(1) ねらい

・普通教室以外の場所での緊急地震速報通報装置作動時の安全確保の方法や避難の仕方を身に付ける。

(2) 学習活動の概要

・地震発生を想定し、１・２年が子どもプラザに、３～６年が小学校にいる６校時に行った。１・２年は子どもプラザ職員の指示のもと校庭への避難の仕方を訓練した。３～６年は特別教室［理科室、音楽室、家庭科室、パソコン室］で緊急地震速報通報を聞き、普通教室とは違う安全確保や避難の仕方を訓練した。

◇「プラザの先生の言うことを聞いて素早く避難ができた。（２年)」「大机の下にグループみんなで身を隠した。(理科室)」「ピアノの下に入ろうとしたら机が置いてあって崩れ落ちることがあるので入ってはいけないことがわかった。(音楽室)」と普通教室以外の場所での身の守り方を考え行動することができた。

４　青池保育園と合同の避難訓練　　11 月９日（木）２校時（９：50～10：20）

(1) ねらい

①緊急地震速報通報装置作動時の安全確保の方法を身に付ける。

②地震と火災を想定し基本避難経路以外の経路を通って避難する方法を身に付ける。

③煙体験を通して煙から身を守る方法を身に付ける。

④放送機器が使用できないことを想定した職員の行動訓練（初期消火・伝達・誘導・確認）をする。

⑤青池保育園とともに避難訓練を行い、お互いの校庭への避難の仕方を知る。

(2) 学習活動の概要

①朝の学級の時間８：20～８：40 に、机下へ頭や体を入れる入り方を練習し、煙の中では姿勢を低くして煙を動かさないように移動することを確認する。

②緊急地震速報通報装置作動９：50 により、児童は赤白帽子をかぶり机下へ入り、机の脚を持って揺れが治まるのを待つ。揺れが治まった後、火災報知器が鳴る。職員は児童を掌握しながら注意を払って指示を待つ。

③電気系統の故障により緊急放送が入らず、教頭、伝達係、消火係が出火場所の家庭科室へ行き出火を確認し、消火係が初期消火し鎮火する。教頭は複合火災受信機の電話を使って出火場所近くの消火栓から学校長へ電話連絡をする。学校長の避難指示を受け、教頭、伝達係が各階へ避難指示を伝える。誘導係は窓を閉め児童に避難指示、地震火災により基本避難経路を通れず避難をする。避難中に煙体験をする。

④校庭避難後、担任は児童数を確認し避難状況を教頭に報告する。避難確認係の職員は、残留児童がいないか確認し、校舎の被害状況と共に教頭へ報告する。教頭は児童の避難状況と校舎の被害状況を校長へ報告する。

⑤青池保育園も同時に地震避難訓練を行い園児は校庭へ避難する。

◇６回目となる避難訓練で児童は素早く落ち着いて安全確保ができていた。放送機器が使用できない想定の中、複合火災受信機の電話を使用して「伝達・誘導」の職員の動きを確認することができた。避難経路を移動する中で煙体験を行い「煙で周りが見えなかった。吸ったら怖いなと感じた。」と、児童は鼻や口をハンカチ等で覆うことの重要性を実感できた。青池保育園は本校校庭を避難場所としている。今後も合同訓練を行い、協力して園児・児童の安全を確保できるようにしていく。

５　防災安全教室　講演会　　10 月 20 日（金）９:45～10:30　※区長会と共催

演題「気象災害から命を守る～積乱雲に気をつけて！～ 」

(1) ねらい

「急な大雨」「雷」「竜巻などの激しい突風」から身を守る方法を学ぶ。

(2) 学習活動の概要

防災アドバイザーの長野地方気象台次長上野忠良さんと防災業務係長髙橋恵美子さんから「急な大雨・雷・竜巻からどうやって身を守るか」について、DVD の映像を基に気象変化の説明や避難の仕方を教えていただいた。

発達した積乱雲（雷雲）の下では、「急な大雨」「雷」「竜巻などの激しい突風」が発生します。川や用水路の急激な増水、道路の冠水、落雷、竜巻等がおこり、あっという間に危険がやってきます。積乱雲が近づくしるしは「黒い雲が近づく」「雷の音が聞こえる」「急に冷たい風が吹く」です。「自分は大丈夫」「まさか！」「恥ずかしい」という気持ちは捨て、すぐに危険な場所から離れ、安全な場所（丈夫な建物の中）へ避難しましょう。

◇子どもたちにとって増水や落雷は身近なものであり、説明もわかりやすかったので関心を持って話を聴くことができた。「金属を身につけているかどうかは雷に関係ない。」「雷の音が遠くでなっていても次の雷は今いる場所に落ちる可能性がある。」などの正しい知識を「学校だより」によって地域や保護者に伝達することができた。

６　災害時における避難行動を考える学習

(1) ねらい

行動マップをもとに地区の危険箇所を確認し、地区の方から地区の防災計画について話を聴き、地区における災害時の自分たちの行動の仕方について考える。

(2) 地域学習　10 月 20 日（金）14：00～15:35

①朝の活動時間に、地区グループで昨年度考えた避難経路や行動について復習する。

②児童は担当職員、地区の方と一緒に下校しながら、昨年度作成した行動マップを基に危険箇所を確認して写真をとる。また、昨年度考えた避難経路が、実際、災害時の避難経路になり得るかを確認する。

③各地区公民館で地区の方から危険箇所や地区の防災計画について話を聴く。

④地区における災害時の行動の仕方について地区グループで話し合い、考えを学習カードへ記入する。

・実際に歩いてみると自分たちが気づかなかった危険箇所があり、昨年考えた避難経路は変更することにした。屋外で災害にあったら大きな道を選んで移動して水路には近づかない。１人で行動しない。・非常時は公民館が第一避難場所になる。公民館には災害に備えて非常食や水、ヘルメットが準備してあることがわかった。・小さい子どもやお年寄りを優先して避難させ、山が崩れそうだと思ったら近づかず、離れると教えてもらった。

⑤児童は、帰宅後、保護者に地域学習で学んだことを伝え、家庭で地域防災について話し合い、その様子を学習カードへ記入し学校へ提出する。

・災害が起きたとき、どこに避難するか改めて話し合い、家からの避難経路を確認し、防災リュックを実際に作った。・大人も知らない事が多かったので今回の防災教室で確認ができた。子どもが地域の方と一緒に地区を回り、話を聴いて避難方法を考えたことは、本当に災害に遭ったときに役立つと思う。［学習カード保護者の記述より］

(3) 全校発表会　10 月 25 日（水）・26 日（木）　朝の活動時間８:20～８:40

・地域学習で学んだ「地区の危険箇所や気をつけること、自分たちが考えた地区における災害時の避難経路や避難の仕方、地区の方に教えてもらった地区の防災計画」を全校に発表し互いに学びを共有した。

通学路が土砂崩れで通れなかったら保育園側の道路から帰ります。途中にあるため池はガードレールがないところもあるから落ちないように近づきません。家族がそばにいないときには、地区の大人に困っていることを伝えて助けてもらいます。

(4) 電子地図による行動マップの作成　12 月 14 日（木）

・防災アドバイザーの 落合鋭充さん（特定非営利活動法人 DoChubu）のご指導のもと、信州大学生に支援をしてもらいながら、４・５年生が、地域学習で地区ごとに調べた危険箇所の目印や写真、避難経路等を電子マップに入力し、災害時の行動マップを更新した。

・児童が更新した電子地図の防災行動マップを家庭や地域に紹介し、地域ごとに印刷して家庭配布した(http://community.dochubu.com/site/hirouchi/)。

◇地域の皆さんに語り手となっていただけたことで学習が成立した。地区の方の話を聴き、自分の目で確かめながら行う避難経路の検討は、児童の自分で考え行動する力を高める学習となった。「子どもの話から防災についてしっかり勉強していることがわかった。家庭でも災害への備えについて話し合った。」児童の学びを伝え、学校と家庭が防災情報を共有することは、学校の防災教育への理解とともに、いざというときの備えにつながった。

７　学校防災アドバイザー　廣内大助先生（信州大学教授）のご指導から（抜粋）

・通学路の危険を児童が認識し、どのように対応すればよいか考えることは重要である。児童が地域に出て自分の地域を知り、自分で避難行動を考えることは大変意義がある。地域との関わりの中で防災教育を進めることはとてもよい取り組みである。

・避難訓練は様々に想定をかえることで、児童に考えさせる場をつくり経験を増やしていくことができる。また、職員にとっても様々な安全対策を考えるようになり実践的な避難訓練となっている。

・地域とともに避難所開設について具体的に考えていくことが必要になっていく。

８　まとめ

・廣内先生にご指導をしていただき、様々に想定を変えた避難訓練の必要性を感じながら、全職員で児童の安心安全が守れる災害時の対応を考え取り組むことができた。その中で、児童は自分の命を守るためにどのように行動したらよいのかを常に考え、防災への意識を高めていった。

・地域各所（区長会、青池保育園、信里子どもプラザ、地域委員会、民生委員、消防団、駐在所）と連携して避難訓練や防災安全学習を進めることができた。地域学習では、子どもたちが地域に帰り、地域を知り、地域の人とつながりを持つことができたことが地域の防災力を高めることにつながったと考えている。来年度は５カ年計画の最終年となり地域と共に行う総合防災訓練を計画している。今年度の連携を基に、どのような総合訓練にしていくのか、地域・PTA と準備を進めている。

（　文責　教頭　宮川史枝　）

防災管理、防災教育の充実に向けた取り組みについて

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

44　長野市立清野小学校

１　はじめに

本校は、松代地区の東、標高 357mに位置し、校舎西側 100mほどの所に妻女山が迫っている。妻女山から続く山並みは松代地区の南側を通り千曲川に沿うように北へ続いており、本校はその山並みと北を流れる千曲川に挟まれたような位置にある。この地区の人々の生活圏は山並みの北部に位置する松代の町や長野市中心部方面である。そのため、赤坂橋、岩野橋、松代大橋を渡って千曲川を越える必要がある。また、他にも本校の北側、千曲川の手前に高速道路が通っている。児童数は 46 名。全員徒歩で集団登校、下校は、低学年を中心にプラザ利用の児童が多く、それ以外の児童は、地区ごとにまとまって下校をしている。通学路には山際の道を歩く場所もあり、大雨の際は、渓流付近の土砂崩れ等に十分注意が必要である。近年、地震等の目立った被害はないが、数年前の大雨では、千曲川の河川敷の田畑で水没した箇所もあり、被害を出している。本校も立地条件からみると、豪雨の際は、土砂崩れや川の氾濫などの危険も考えられる。

２　本校の防災体制について（概要）

(1) 学校防災体制

「清野小学校　危機管理マニュアル」によって防災計画を立てている。

(2) 職員防災組織

学校長を本部長として防災職員組織を作り災害時に備えている。

(3) 防災教育

① 避難訓練の時に、事前指導・事後指導を行い、防災意識を高める。

② ９月の地震災害を想定した避難訓練時において、災害時を想定して危険個所、その対応について学習する。学年に応じて学校内の様々な教室を想定する。また、通学路、自宅についても安全について考えを広げていく。

③ 地震災害に関わる合言葉『「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所を探すこと』を指導していく。

(4) 管理

① 体制整備と備蓄

ア　学校防災マニュアルを整備する。

イ　保護者や地域、自治体等と連携した体制整備を行う。

ウ　二次災害を想定したマニュアル（二次避難場所）整備をする。

エ　災害発生時や待機時に必要となる備品や備蓄を整える。

・地震発生時の安全確保に役立つ物資

防災ずきん・ヘルメット・ハンドマイク・懐中電灯・ランタン・バール・ジャッキ

・二次対応時に役立つ物資

携帯ラジオ・携帯テレビ・乾電池・トランシーバー
・学校待機時に役立つ物資（引き渡しができず学校宿泊を想定）
飲料水・食料・カセットコンロ・簡易トイレ・毛布・寝袋・医療用品・発電機・充電器

② 初期対応と二次対応・対策本部の設置

ア　学校内の『「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所』を把握し増やす。
・職員研修を行い、場所を把握する。簡単にできる安全対策を行う。

イ　地震発生時に『「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所』を判断し、指示する。

ウ　避難後に二次災害を想定して、二次対応を検討する。
・ハザードマップを基に、地震災害の場合の二次災害、土砂崩れの場合の二次災害などを想定し、学校防災マニュアルを整備していく。

エ　子どもの安全が確保された段階で、学校長を本部長とした対策本部を設置する
・学校防災マニュアルを整備していく。

③ 引き渡し

ア　引き渡しの判断基準となるルールを設定する
・市教委、周辺学校とある程度基準を同じにしておく必要がある。
・震度５以上が引き渡しをお願いする基準となる。
・家庭状況を把握し、保護者が帰宅困難となり、引き渡しに来られない状況を想定する。その際に何人程度の子どもを長時間学校に待機させるのかを想定し、対策を講じる。

イ　引き渡しの手順を明確にする
・引き渡しカードの準備、整備
・引き渡しの手順（カードの照合、チェックの方法）
・保護者の引き渡し動線（自家用車をどのように流していくのか）

④ 避難訓練

ア　地震災害に関わる合言葉『「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所を探すこと』を指導していく。

イ　９月の地震災害を想定した避難訓練時において、災害時を想定して危険個所、その対応について学習する。学年に応じて学校内の様々な教室を想定する。また、通学路、自宅についても安全について考えを広げていく。（第３回避難訓練の計画）

ウ　授業時以外の避難訓練（第２回避難訓練）の想定を地震にして行う年を設ける。

３　学校アドバイザーの関わり

今年度は、本校の避難訓練へのアドバイスをいただくためにご来校いただいた。

(1) 避難訓練についてご指導いただいたこと

① 回数

年３回が一般的だが、回数を増やすことも検討していく。

ア【ショート訓練】
地震→「避難してください」→「おさまりました。授業を続けてください。」

イ【外に行く訓練】
グランドで安否確認→登校した人数を把握（名簿《保護者連絡用》を持ち出し物品に。）

② 判断をともなう訓練（教師のトレーニング）

ア　いつ（どのくらいで、どんなときに）、どこへ（外へ出るか出ないか）

イ　電源がシャットアウトした場合

ウ　授業中と授業以外、予告ありと予告なし

エ　異常があるかないか。→直後に異常があれば、まず情報を得る。

③ 追い出しの係（各階ごと）

トイレ、ロッカーなど確認して何もなければチョークで○を付ける。出たらいなくても探しに戻らない

④ 避難場所（撤退の場合）

一次避難→校庭、　二次避難→どこか決定しておく。（ルート、距離を把握）

⑤ 備蓄（大災害で避難所になったら）

子どもを守るため、子どもを最優先する。最低飲んだり食べたりできる量、数、何回何日分対応できるのか。冬の対応も考える（ストーブ、水など）

⑥ 引き渡し

安全を確認して引き渡す。引き渡し後の被災もある。

(2) 防災学習について

① 自分の身を守るための教育…総合的な学習の時間などを活用して学習する。

② 地震、土砂災害、大雨洪水などの自然災害…理科などで災害に関わる学習をする。（あらゆる学習で関わっていく）

③ 防災３原則「落ちてくるもの、倒れてくるもの、移動してくるもの」を把握させる。

④ ハザードマップなどで各家庭の把握をする。

⑤ 火を見たら消化器で初期対応…消化器の使用方法、ある場所を知っておく。

⑥ 地域での防災教育…４月当初、大規模地震で学校がダメになったらどこに逃げるのか（探さない）、ということを保護者に伝える。（逃げることの徹底、避難所を決めておく）

(3) 緊急地震システムについて

希望の場合は計画的に進めていくこと。

４　事業の成果及び今後の課題

今年度の成果は、アドバイザーの榊原保志先生から支援を受けたことで、今まであらゆる想定を考えて避難訓練を行ってきたが、さらにどのようなことを想定して実施すればよいかを具体的に教えていただけたということである。そして、教師も児童も判断力を鍛えることが大切だということをしっかり意識して実施していきたい。

今後の課題としては、大規模災害の場合の二次避難、引き渡し、備蓄について具体的に考えていくことが挙げられる。アドバイザーの先生には実際に避難訓練を見ていただきさらなるご指導を受けたい。また、家庭でもいざというときの避難場所・避難方法について話し合いをしてもらうことなどを呼び掛けていくことが必要だと考えられる。

５　まとめ

今後もアドバイザーの先生からご支援を受けながら、本校の実態に合わせて様々な想定の避難訓練を行ったり、必要な備えを整えていったりして万一の災害に備えていきたい。

（　文責　教諭　原　朋野　）

本校における防災管理・防災教育の充実に向けた取組について
―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

45　長野市立戸隠中学校

１　はじめに

本校は、長野市北西部に位置しており、北に戸隠山、高妻山を仰ぎ、眼下には裾花川が流れる自然豊かな環境の中で全校生徒 69 名が学んでいる。また、冬には多くの雪が降り、スキー場が賑わう、山間地の小規模校である。

生徒達は明るく素直で、「己に克つという強い意志を持ち、粘り強く最後までやりぬく」を学校目標に、日々の学習、生徒会、部活動などに取り組んでいる。

冬の校舎の様子

２　本校の防災体制について（概要）

一昨年度までは、年に３回の避難訓練を行い、訓練に生徒達は真剣に取り組んできた。その内容は、火災と地震を想定し、消火訓練や冬期（積雪がある場合）の避難場所の確認をするなど、一般的なものが多かった。

昨年度は、「学校防災アドバイザー派遣・活用事業」を受け、これまでの防災教育を見直すことを検討した。「３年周期で体系化すること」と「同じ地区にある保育園や小学校との連携をすること」を軸に据え、計画を立て、９月には大地震を想定し、保・小・中の合同引き渡し訓練、11 月には授業時間外の避難訓練、そして煙幕体験と、新しい試みを行った。また、３年周期の防災教育を通して、生徒が中学校在籍期間中に多様な経験を積むことができるように配慮した。（下の表で、②年目が本年度に該当）

日時と目的 ＼ 年のサイクル	第１回（４月） 年度当初の避難場所と経路の確認	第２回（９月） 小・中・地域と連携した避難訓練	第３回（11 月） 冬期の避難経路の確認と応用訓練
①年目	避難訓練（火災） 消火訓練	避難訓練（地震）	授業時間外を想定した避難訓練 煙幕体験訓練
②年目	避難訓練（火災） 消火訓練	不審者対応訓練 連絡系統の確認	避難訓練（地震） 負傷者の応急処置学習
③年目	避難訓練（火災） 消火訓練	避難訓練（地震） 炊き出し、避難所学習	雨天（降雪）時を想定した訓練 不明者の捜索訓練

今年度は、２回目と３回目の防災訓練をより想定を悪条件にすることによって、災害への対応力を増すことをねらい、実施した。９月１日に行った２回目の避難訓練は、休み時間に地震が発生し、引き続き火災が発生したという想定で、生徒が放送の指示によって自主的に校庭へ避難するものであった。この訓練では、生徒が与えられた情報をもとに、自分で安全かつ最短ルートを判断して避難することと、職員が状況を正確に把握し、全体指示を的確に出すことが主なねらいであった。12 月 18 日に行った３回目の避難訓練は、積雪時に火災が発生し、火元が昇降口付近のため､唯一避難可能な別の出口から舎外へ出て校門付近に一次避難をし､さらに、安全な避難場所へ二次避難するという想定で行った。この訓練では、積雪時の際の避難経路が昇降口以外に１カ所しかないことと最終的な避難場所が校庭ではなく、小学校の体育館であることを、体験を通して理解させることが主なねらいであった。

今年度予定していた不審者への対応については、地域の特性から、積雪時の避難訓練より防災の優先度が低いと判断して行わなかった。負傷者の応急処置については、３年生は既に学習していたので、１年生と２年生は避難訓練とは別日に、AED を使った救命講習会を通して学習をした。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　学校防災アドバイザーから支援を受けたいと考えたこと

① 避難訓練をより災害に対応した内容にするための方法

② 避難訓練での問題点

③ 防災管理上の問題点

(2)　学校防災アドバイザーから受けたアドバイス

①　２回目の避難訓練の際

ア 職員の見回りにかかる時間が短く、生徒は３分程度とどまっただけで済み、よかったが、さらに時間を短縮したい。

イ 消防署や外部へ通報する際、校内電話が使えないケースもあるので、そうした場合は携帯電話を持って避難してから速やかに通報する。

ウ 放送が使えない場合の生徒や職員への指示伝達方法を決めておきたい。

エ 地震等で電源が落ちた場合は､生徒や職員への伝達がスムーズにできずに危険な状況になる可能性が高まるので、直ちに避難行動へ移る。

オ 職員が見回りをして生徒の存否を確認した際､生徒がいない場合は教室の入口の戸へチョークで○印を書いておくと､万が一校舎に生徒が取り残されて消防士が校内を捜索する時に時間を節約できる。

カ 火災が複数箇所で起きた場合や一部の避難経路が通れない場合に､その状況を早く把握して生徒に速やかに伝え、次の行動を指示する訓練もしておきたい。

キ 学校外（家や登下校など）で災害に見舞われたことを想定し、戸隠ではどんな災害が起きる可能性があり､その際どう行動したらよいかなどを考える防災教育を

行っていきたい。

ク 職員が消火器や消火栓を使えるかどうか把握し、３年に１度は消火器・消火栓使用の講習を行いたい。

ケ 北朝鮮のミサイルに関わって、生徒にＪアラートなどの基礎知識を教えたり、避難場所や注意事項等を伝えておく必要がある。

② ３回目の避難訓練の際

ア 今回の避難訓練では、避難口に置かれた下履きに履き替えて外へ出たが、普段の状態で避難訓練を行いたい。しかし、上履きで外へ出ることは健康上問題があるため、例えば、冬場は普段から下履きを教室前の廊下に置くような工夫ができないだろうか。また、防寒着を着て避難したことは良かった。上履きを手に持って避難したが、上履きをカバンに入れ、カバンを背負って避難する方法が良い。

イ １階トイレ前から避難することも想定し、駐車場の除雪を欠かさないようにしたい。大雪の際に職員の車を昇降口付近に置く場合、避難がスムーズにできるように駐車をする必要である。

ウ 避難指示の放送が流れてから一次避難できるまで７分かかった。さらに時間を短縮できるように工夫したい。また、初期消火の結果を待って避難指示を出したが、出火を確認した時点で避難指示を出した方がより生徒の安全を確保できる。

エ 生徒が避難するケースを想定し、校舎の南側は落雪の危険があるため避難経路としないなどの事前情報や災害が起きた際のその時々の情報を生徒に伝え、生徒が的確に判断できるようにしたい。さらに、自分の身は自分で守る意識を育てておきたい。

オ 大雪の中での訓練も実施しておきたい。その際、生徒の歩行をどうサポートするか方法を考えておく必要がある。

カ 来年度は、申請をして緊急地震速報が受信できる機械を設置し、避難訓練の際にも活用したい。

(3) 学校として取り組んだこと

① 避難訓練の前に実施計画を榊原教授に目を通していただき、修正すべき点等のアドバイスをいただいた。そして、そのアドバイスを生かして避難訓練を行った。

② 積雪時の避難訓練の必要性を指摘いただいたので、当初予定していた２回目と３回目の避難訓練の内容を変更して行った。

③ ３回目の避難訓練の校内巡視では、生徒の存否が分かるように、教室の出入り口の戸にチョークで印をつけるようにした。

④ 積雪時の避難経路を複数確保するために除雪の範囲を広げたり、二次避難の際に生徒をサポートするための乗用車を玄関の近くに駐車するようにした。

４ 事業の成果及び今後の課題

(1) 避難訓練を実施する際に、職員の視点では見えにくい所を学校防災アドバイザーに教えてもらい、訓練の内容をより災害に対応できるものへ修正することができた。

(2) 地域の特性に沿った防災教育のあり方を再考する機会を与えていただいた。

(3) 防災教育は年３回の避難訓練だけでなく、短時間でできる訓練を増やすように助言をいただいた。その時間をどう確保するか検討する必要がある。

５　まとめ

学校防災アドバイザーからの助言によって、地域の特性や想定をより深刻にするなどの新たな視点で３年周期防災計画の内容や避難訓練の内容を見直し､修正することができた。しかし、学校防災アドバイザーからの助言を取り組みに移せたことは一部に止まっている状況なので、今後はさらに新たな取り組みへつなげていきたい。

（　文責　教諭　野口泰宏　）

本校における防災教育の充実に向けた取組について
―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

46　長野市立鬼無里中学校

１　はじめに

(1)　本校の生徒数

１年生　男子１名　女子１名　計　２名
２年生　男子４名　女子５名　計　９名
３年生　男子４名　女子２名　計　６名
全校　　男子９名　女子８名　計 17 名

(2)　学校の立地等

旧鬼無里村を学区とし、県庁より西へ 20ｋｍに位置し、戸隠連峰西岳や一夜山、荒倉山、虫倉山等の山々に囲まれる渓谷型の盆地にある。鬼無里の地形は、起伏に富み、中央部を流れる裾花川、支流の小川、天神川等の川沿いに大小 40 余りの集落が点在している。山林が面積の 85%を占め、奥裾花自然園に広がるブナ原生林の水芭蕉大群落に代表されるように豊かで美しい自然に囲まれている。

起伏に富んでいるため、台風などで大雨が降った時などは、土砂崩れ等が起きやすい地区もある。

平成 26 年 11 月長野県神城断層地震により被災し、旧中学校の体育館と校庭が使用禁止になった。校舎の老朽化と体育館の使用禁止という状況から、平成 28 年 4 月より鬼無里小学校校舎（長野市鬼無里 77）で小学校と一緒に生活している。

２　本校の防災体制について

(1)　防災教育の課題

① 避難訓練を年に３回行っているが、毎年同じ内容で繰り返しており、職員や生徒が決まった形で動くだけにとどまっている。生徒や職員が主体的に判断し、状況に応じた避難行動がとれるような訓練にしていく必要がある。

② 防災教育が避難訓練のみになっていて、日常的に防災について考えるようにしていく必要がある。

③ 防災マニュアルをもっと使いやすいものにするための工夫をかんがえていきたい。

３　学校防災アドバイザーのかかわり

(1)　第１回目の学校防災アドバイザー訪問

① 学校から

ア マニュアルはあるが、いざと言うときになかなか使いにくい。使えるようなマニュアルにするにはどうしたらいか

② アドバイザーからの助言

ア マニュアルはマニュアルでこのままでもよいのではないか。

イ 思考のショートカットを行う。こういう時はこうするといいというルールを作っておくと行動しやすくなる。１回経験しておくことで、子どもたちはできるようになる。

ウ 臨機応変に対応できるようにするために、みんなで、こういうことならできるという話をする。例えば職員会で防災についての情報交換の時間を設けるなど。

エ 考える避難訓練への転換　少しずつでもよいので、考える時間を設け、どこへ逃げたら良いのか、学校で危ない所はどこか調べるようにすることもよい。

オ 子どもたちと一緒に実際に地区を歩き、ここはこんな危険があるというようにしていくといざというときに使える。

カ 避難訓練は、生徒が何も話さないで無言で行うことを前提としている。しかし、本当は先生達だけが報告して終わるのではなく、生徒同士が気軽に声をかけ合い、「〇さんがいません。」のようなことが自然に声に出るようなことが大事である。見た目重視で整然とならんで静かにしていることが大事ではない意識を変えていくこともしていくことも大事である。

(2)　第２回目の学校防災アドバイザー訪問

① 学校から

ア 昨年と同じではなく、実際に火災が発生した時に起こりそうな場面を想定し、発見した人、放送をする人、非常ベルがなった時本当か確認する人、授業を行っている人など設定し、こういう場面ならこうするという設定をして行った。先生方でも違うシナリオだとスムーズにいかないところもあった。しかし、それがよい勉強になった。

②　アドバイザーからの避難訓練への助言

ア いろいろやってみてわかることが大事。できなかったことがはっきりすることが次へ活きていく。

イ 毎回同じ人が同じ役をやるのではなく、もしその人がいなくてもできるように役を違う人にかえていくこともあってよい。ある想定だけではなく、想定の幅を広げていく。正解はないので、きれいな避難訓練ではなく、自分たちで考える避難訓練にしていてほしい。

ウ 避難経路を自分たちで作るということもできる。与えられたものだけではなく、自分たちで考えることで、指示を待つだけの避難訓練から、考える避難訓練へとかわっていくことができる。

エ 避難訓練を行ったら、先生たちだけでなく、子どもが振り返る避難訓練にする。静かにできた　整然とできただけでなく、ここはこうした方がよかったとか、先生方へここは不安だからこうしてほしいという要望があってもよい。

③ アドバイザーから学習指導要領改訂のポイントと防災教育　防災アクティブラーニングについて

ア 主体的対話的で深い学びに対応する防災教育の例として、タブレットを持って、グループで地区の危険な所を探し、防災マップをつくる。自分で探すということやグループで取り組むということが今回の改訂につながってくる。これは校内でもできる。

イ 下のようなワークシートを使って、トラブルと解決策を考え合うこともできる。

トラブル	解決策
廊下が煙だらけ	姿勢を低くして窓から逃げる

ウ 協調による防災行動 防災行動は集団で行われる可能性が高い。災害時は、個人が指示をすべて理解できない状況が予想されるが、協調により解決できる可能性がある。また、教員からの指示の不確実も予想され、必ずしも教員からの指示が出せるとは限らない。さらに必ずしも教員の指示が的確とは限らない。(すべての状況を瞬時に把握することは不可能であるから）そのための理想的な対策は、協調性を高めること・子ども自身が行動を考える態度・知識を備えることである。これは、「主体的・対話的で深い学び」に関係する。

4　事業の成果及び今後の課題

(1)　成果

① 指示を待つだけ、決められたことをするだけの避難訓練から、生徒や教師が考える避難訓練に変えていくという意識が生まれた。そのため、避難訓練の仕方をかえてみようということにつながり、先生方同士の対話ができた。また、うまくいかないところもでてくることで、さらに避難の仕方などを考えるきっかけになった。

② 今回は避難訓練を窓口に考えたが、理科や総合的な学習の時間などを使って、地域を調べてみる、校舎内の期間箇所を探してみる、避難経路図を考える、避難訓練を生徒と考えるなど主体的・対話的に防災を考えていくきっかけになった。

(2)　課題

① 時間的な制約があるので、良さは理解しても実際にできないこともある。計画的に防災教育として教科や学活、総合的な学習の中に位置づけていくことが必要だと思われる。また、職員研修の一つとして、防災についても位置づけていきたい。これについても年度のはじめから計画的に行うようにしていくことで、無理なく行えるようにしたい。

（　文責　教頭　桂本久美子　）

子どものいのちを守るための防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―
（防災計画の見直しと避難訓練の実施）

47　須坂市立相森中学校

１　はじめに

本校は、須坂駅前から小布施町境までの広範囲の通学区を持つ、全校 344 名の中規模校である。

須坂市では、昭和 56 年に市内を流れる宇原川が氾濫し、中学生が濁流にのみこまれ命を落とすという痛ましい災害が発生した。学校近隣では、大雨になると千曲川の氾濫防止のために北相之島排水機場が閉められ、浸水の恐れのある地域があり、昨年 10 月 23 日の台風上陸時には、道路が冠水し休校となる学校もあった。

地震は過去に大きな被害がないため、地域として、地震対策への意識が統一されていないが、行政としての救護所設置のマニュアルができたり、災害危機管理課から災害避難用物品が設置されたりと取り組みが進んでいる。そこで、本校では、子どもの命を守ることを目的とした災害避難、災害防止のあり方の見直しを行い、何年かかけて対策を充実させていきたいと考えた。

２　本校の防災体制について（概要）

(1) 災害発生時

例年、学活中や休み時間に実施する避難訓練にとどまり、地域が壊滅するほどの地震や大雨を想定した避難訓練を実施することはなかった。また、災害発生時に校舎の見回りや、引き渡し訓練を実際に行ったことがなく、引き渡すために必要な知識や工夫を考えてこなかった。

(2) 避難中

災害時に生徒がパニックを起こすことやケガをすることなどの想定が簡易なものだったので、長時間支援や救急車が来ない場合のアセスメントや生徒の精神の安定を図る手段などの検討をしてこなかった。

(3) その他

災害は突然起こるものであり、家にいる時、学校にいる時、登下校時、さらには、電車乗車中など場面によってどう判断し、どのように対応するべきかを生徒とともに考えておくなど、防災管理・防災教育にも課題が山積している。

３　学校防災アドバイザーの関わり

学校防災を見直す必要性や観点を全職員で共有し、それぞれが担当する係の仕事をどのように見直していくか、また、見直していく上で、最悪な災害を想定することが大事であり、災害発生のメカニズムや、想定すべき災害についての職員研修をアドバイザーにお願いした。

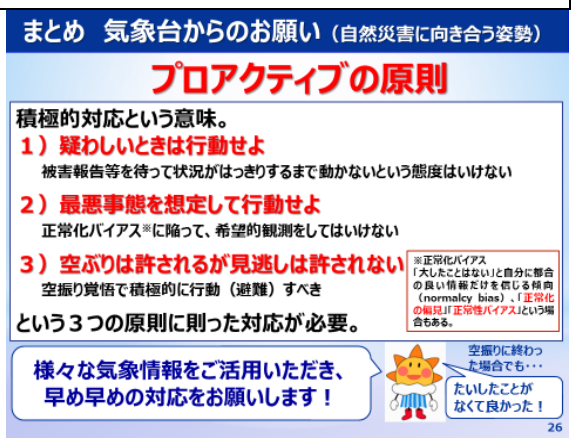
さらに、災害発生時に、子どもの命を守るために必要な心構え、知識、行動、工夫、

物品などを提示していただき、災害発生時のリスクマネジメントについて、職員研修と実践的な避難訓練を行った。

(1) 10 月 23 日　職員研修
　講師　長野地方気象台　気象情報官　佐藤義之　先生
（内容）

① 地域の自然災害リスク
② 危機と認識できる感性を持つ
③ 防災気象情報の活用
　～事前の情報収集を行い、防災・減災へ～
　ア 意識として必要なのは、「自然災害国日本に住んでいる意識と立ち居振る舞い！」であること。
　イ 自然災害から自分を守るという教育⇒危機に際し、その事態を「危機と認識できる感性」を育てる。
　ウ 学校または校外で自然災害に遭遇した場合の子どもたちを守るシミュレーションが大事である。
　エ 「危機と認識できる感性」を持たなければならない。
　オ 自分の居る場所のリスクや避難するルートのリスクを認識し、事前の情報収集を怠らない。

◇地震は備える　◇津波は早めに逃げる　◇活発な火山には近づかない ◇大雨は適切な避難



研修会資料抜粋

(2) 11 月 21 日　避難訓練の実際（20 分）と防災講演会（30 分）
　講師　長野地方気象台　気象情報官　佐藤義之　先生
① 内容
　ア 避難訓練（想定災害規模：大地震がおこり「校舎内のガラスが割れ、美術室前廊下も崩壊している」）①をうけ、訓練で強化する点をピックアップし実行してみた。
　・ 災害後の避難経路の確認（トランシーバーを使用した本部との連絡）
　・ 誘導係の追い出し（全生徒職員の避難誘導、避難後の校舎に再入校させないこと）
　・ 欠席･早退･遅刻など避難時に不在の生徒職員の情報共有、けが人・病人など処置が必要な生徒の情報共有のあり方→欠席、早退者と傷病者について、口頭での報

告だけでなく学年用、救急用のホワイトボード（計４枚）へ記入する。

・ 引き渡し準備として、地区別に整列→不在者、傷病者をホワイトボードで確認し担当地区生徒の確認

イ 防災講演会

・ 災害の起こり方や、自分の住んでいる地域でも災害が起こる可能性があることを学び、いつ災害に遭っても自分で危険を予測し、回避できるような方法を考える必要性を感じ、「まもるいのちひろめるぼうさい」（日本赤十字社）の資料（P47）を用いて、各自で考える機会とした。

② 反省と課題

ア 「職員による避難経路確認」は、特に必要だと思う。

イ 「地区別に整列」やってみることに価値がある。大災害の時に、オクレンジャーも使えなくなることを想定し、震度〇度以上であればお迎えにくるなど、保護者判断の必要性とその基準を検討したい。

ウ 経路確認には時間はかかるが、確認してより安全な経路を通りたい。

エ 様々なケースを想定して行う訓練も非常に大切なことだと思う。

オ 「生徒の動き」というより「職員が指示を適切に出し、生徒がしっかりと聴けるか」が重要だと感じました。職員も日常的に「危機管理意識」を持つことが必要だと分かりました。

(3) 12 月 21 日　防護団の見直しに関する職員研修会

講師　信州大学教育学部教授　榊原保志　先生

最悪な災害を想定した各係の心構え、活動内容や準備品、子どもへの対応などに重点を置き、本校防護団計画を見直したいと考えた。避難時にどんな場面が起こりうるのか、どんなことを大切に見直していくのかなどを教えていただいた。

① 内容

Q地震発生後に火事を発見しました。発見者が行うことは？

・大きな声で火事を知らせる。

・初期消火・・・そのために校内の消火器のある場所を確認しておく。

→消火器・消火栓の研修。

Q大きな地震が発生した直後、学校はどう対応しますか？

・火災が想定される各教室、各棟を中心に火災の確認。トランシーバーでいち早く本部と連絡を取れる環境づくりをしておく。

・火災や校舎破損などの状況を把握し、本部に連絡，指示を仰ぐ体制作りが急務である。

・電気系統の壊滅で、校内放送が入らない状況での避難訓練が必要である。（避難誘導・引き渡し）

Ｑ点呼したら一人の生徒がいません。どうしますか？

・二次災害が起こりうるため、自分の判断で救出のために校舎内に入らない。本部の指示を仰ぐ。
・追い出し係の先生はパニックを起こし、隠れてしまう生徒も居るため、清掃用具入れの中や教卓裏の戸棚の中等も確認し、最終確認が終わった教室の黒板に〇をつける。
　→避難するときには消防署へ連絡をしてあるので、点呼の直後には消防署が到着してくる。〇をつけてきていない場所を最優先に捜索ができる。
・冬場の積雪のある時期に地震が起き、積雪の中を上履きで避難しなければならないとき、どのような手段が講じられるのか。検討をしておくべきである。

Ｑ最悪な状態を想定した持出品について　（緊急持出救急用品に付け加えておく）

・ブルーシート･･･トイレ・救急処置場面・パニックを起こす生徒のクールダウンなどに必要
・生徒名簿･･･引き渡しに必要な名簿の他に、記入できる一覧の名簿。
・ノートと筆記用具･･･誰がどこの避難所に避難するかを記入したり、タイムテーブルを記入したりできるように準備する
・各係のワッペン･･･どの職員が何の係かが誰が見てもわかるようにする。→色ガムテープで代用も可
※子どもの命を守るために、72 時間は学校が避難場所を運営する覚悟をしておく。水の供給が、滞る可能性も含めて準備できる物は何か、避難してくる市民も入れて計算をし、行政と協力して準備しておく必要がある。

Ｑ引き渡しの際に、兄弟がいる家庭は、どこからお迎えに行くのか？車でのお迎えに立地条件が対応できるか？

・小学校、保育園と連携し、優先順位をつけておく必要がある。
・一方通行にするなど法則を決めておかなければ、大渋滞が起こる。

４　事業の成果及び今後の課題

(1) 防災への備え（リスクマネジメント）

① 自校の備えの必要性について、研修会や避難訓練を通して、全職員の意識の中に芽生えてきた。
② 須坂市教育委員会・健康づくり課・危機管理課に一緒に考えていただく機会を設けていただいた。
③ 風水害などについては、情報をより早くキャッチし適切かつ迅速な指示が出せるようにする。
④ 最悪の事態を想定し、子どもの命を守ることを最優先した取り組みとして、臨機応変に対応できることも必要であるが、係としてしなければならない行動を精選しようと係会を行うことができた。

(2) 研修会で見えてきた課題（榊原先生からの提案）

① 防災学習の実施→授業参観日に全クラス防災学習の公開授業してみたらどうか

② 相森中学校区小学校，保育園と合同引き渡し訓練の実施

③ 相森中学校区小学校，保育園と教育委員会，市危機管理対策室と防災懇談会の実施

④ 積雪時の避難訓練の実施

５　まとめ

子どもの命を守る観点、また、自分の命は自分で守る観点で取り組んでいくことで、多くの課題が見えたが、対策の計画立案までは至っていない。明日起こるかもしれない災害に対応できるよう、何年かかけて見直しと訓練を繰り返していく必要性を感じることができた。

最悪な災害を経験したことがない私たちが、いかに最悪を想定し、地域が壊滅的になってしまった場合はどんな状況になるのか考えていくことは、とても困難ではあるが、リスクマネジメント（災害発生時の避難・避難してからの引き渡しや、傷病者への対応、パニック時の対応・避難を想定した準備品等々）をしておくために、来年度への引き継ぎをし、課題で終わらせないようにしていきたい。

（　文責　養護教諭　小田切優美　）

学校防災アドバイザー派遣・活用事業の取組について
― 防災マップづくりを中核に据えた防災教育
「震災 ～故郷への思い～」の実践を通して ―

48 飯綱町立飯綱中学校

１ はじめに

長野市の北東に位置する本校はおよそ 50 年前に二つの村の組合立の学校としてスタートし、平成の町村合併による町の成立により、一町一校の中学校として存続している。生徒たちはふるさと飯綱の豊かな自然・文化・伝統を自分から意識することはないが多くのところで感じている。「飯綱山こそ　われらが希望」と結ぶ校歌の一節は端的にそれらを感じる心のありようを語りかけ、同時に学校教育目標「自主」「友愛」「剛健」の基底をなしており、日々の学校生活を支えている。

２ 本校の防災教育について

本校の「いいづなタイム（総合的な学習の時間）」では、２年３年でそれぞれ職場体験学習と中学生議会を体験活動の中核に据えるキャリア教育「未来へのパスポート」、主権者教育「15 歳の提言」の学習に取り組み、学校教育目標の具現を図ってきている。

しかし、それらの学習を支える１学年の総合的学習は、これまで地域学習等に取り組んできたが、時間数が 50 時間に限られていたり、地域の特性から冬場に校外での学習を行うことが難しかったりするなどの困難点があった。

一方、生徒会が中心になり、東日本大震災で原発事故が起こった福島を支援するために、平成 26 年度から「ヒマワリ里親プロジェクト」に参加し、活動してきている。また、その取り組みは町内の小学校、高校にも広がってきている。

しかし、福島への支援は、学校内外の取り組みとして定着してきているものの、震災で故郷を離れることを余儀なくされた方々の思いや地震の活動期に入っている日本の中で、自分たち自身が防災意識を高め、災害に備えようと意識するまでの学習には高められていなかった。

そこで、１年生後期の総合的な学習の時間では防災教育「震災～故郷への思い～」を設定し、被災された方々の心情に触れ、自分たちが日常生活を送る地域の自然災害に目を向けて、災害時の行動や防災に向けて、どのような取組をしていったらよいか考え、地域発信していく。

そのような学習を通して、自分の地域への理解を深め、故郷への思いを醸成し、防災意識を向上させることを願った。さらには地域理解や ICT の活用など、２年３年の学習を支える学習として位置づけたいと考えた。

３　指導計画

段階	時	学習内容
出会い	1 ・ 2	○防災教育「震災～故郷への思い～」のオリエンテーションを行う。 ・小学校のときのヒマワリを育てた経験を想起する。 ・題材の説明理由と展開を知る ・学習を通して「なりたい自分」を設定する （＊生徒の興味関心を把握するためのアンケートを行う。）
	3 ・ 4	○木村紀夫さん講演会「東日本大震災６年後の現実と防災」 （木村さんは福島で被災され長野に避難されている） ・木村さんの娘・家族、故郷への思いを聞く。 ・防災教育を通じて、何を学んで欲しいか木村さんの願いを知るとともに自分なりの思いを持つ。
防災マップづくり／防災学習	5 ・ 6	○廣内先生講演会「防災マップをつくろう」 ・防災マップづくりを通して、何を学んだらよいか考える？ ・どんな準備をしたらよいか、理解する。 ・防災マップづくりについて説明を聞く。
	7 ・ 8	○フィールドワーク①（２時間） ・自分の地区に帰り、グループでフィールドワークをし、危険箇所等を調査する iPad を利用し防災マップする。
	9 ・ 10	○ハザードマップ作り① ・フィールドワーク①の見返しを行う。 ・WebGis へのデータの入力、見返しをする。 ・調査結果をグループごと発表し、２回目のフィールドワークへの課題を持つ。
	11 ・ 12	○フィールドワーク②（２時間） ・前時のフィールドワークの見返しをもとに、危険箇所を調べる。 ・フィールドワークを元に防災マップの作成する
	13 ・ 14	○ハザードマップ作り② ・フィールドワーク②の見返しを行い。 ・WebGis を利用して、防災マップを作成する。
	15 ～ 18	○防災学習を行う ・「クロスロード」を実施する。 ・「クロスロード」は社協の協力をえて実施する。
発信	19 ～ 22	○発表会準備 ・自分の地域で、「想定した災害が起きたらどう行動したらよいか？」を考え 、発表会に向けて提言をまとめる。 ○学習発表会 ・学習の成果を学年・保護者に発表する。
振返	25	○事後アンケートを行い、学習のまとめと振り返りを行う。 ・生徒の学習を振り返り、自身の調査活動と題材を評価する。

4　授業実践の様子

(1) 木村さんの講演会　～東日本大震災　６年後の現実と防災～

（生徒の感想）

一番、心に残ったことは木村さんが今行っている活動と今後の生き方についての話です。菜の花を植える活動など、仲間と一緒にがんばっていることが、とてもすごいことだと思ったし、見習った方がいいと思いました。（Ａ生）

飯綱中学校１年生

被災者の思い
防災に生かす

福島から白馬へ避難　木村さんの話聞く

飯綱町の飯綱中学校で26日、東日本大震災による東京電力福島第一原発事故で、福島県大熊町から白馬村に避難している木村紀夫さんらの講演会があった。同校では本年度、1年生を中心に地域の防災マップ作りなどの防災教育に力を入れる計画。被災者の気持ちを知る機会にしようと、生徒90人と町民ら約70人が、木村さんの災害時の体験談や家族への思いに耳を傾けた。

木村さんは大震災の津波で行方不明になった父親と妻、当時7歳だった女の汐凪さん（ゆうな）を捜している。福島第1原発がある大熊町で、木村さんの自宅は海岸から約1・03キロの場所にあった。震災前、一災害時にどういう行動をとるべきか、勉強しておいて」と教えた。

当時、小学校隣の原屋敷にいた汐凪さんは、迎えに来た木村さんの父親と自宅へ向かったという。木村さんは一緒に帰宅しようとしたが、「後ろ髪を引かれる思いだった」と振り返る。

放射能汚染のため十分な捜索ができず行方不明になっていた汐凪さんを捜しに、木村さんは同村から大熊町へ通い続けた。2014年末には1人で捜索し、「やらなければならない気持ち、むなしさが募るばかりだった」という。だが、一緒に捜索する仲間ができたことで、遺品を見つけられ、笑顔が生まれ、汐凪さんらしいなと思っている自分に「ともに歩いてきたんだ」と心の変化を語った。

昨年1月、自宅跡などで遺骨の捜索を続ける木村さん

福島の帰還困難区域で今も娘を捜し続ける人、木村紀夫さん。６年前の３月 11 日、自宅近くにいた家族３人が津波に流され行方不明になった。捜しに戻ろうとした木村さん。それをはばんだのが、東京電力福島第一原発の事故。原発から３㎞の場所にあった木村さんの自宅、警戒区域とされ、立ち入りさえできなくなった。「まだ生きているかもしれない。」木村さんは周囲の避難所で家族の安否をさぐるしかなかった。
父親と妻はその後、遺体で見つかった。しかし、娘の汐凪（ゆうな）ちゃん（当時７才）の行方がわからない。それから６年、放射能という壁にはばまれながら、気の遠くなるような捜索を続けてきた。
（ ＮＨＫクローズアップ現代プラスより）

汐凪ちゃんのマフラーやジャージが見つかったときは、汐凪ちゃんも木村さんも両方ともうれしかったんではないかと思いました。汐凪ちゃんとつながった。本当にそうだと思いました。（Ｂ生）

木村さんは辛いこと、苦しいことがあったと思うけど、頑張っているのでとてもすごいと思いました。私だったら辛くて、最後までできなさそうなことを仲間といっしょにやっていて、私も頑張らなくてはいけないと思いました。また、改めて仲間の大切さが分かりました。（Ｃ生）

自分たちが今、震災があった場所に、どんなことができるのか？自分たちはこれから防災について何をするのか？しっかり考えたいと思いました。木村さんのように頑張り続けたいと思います。そして、自分たちの地域について関心を持っていきたいと思いました。（Ｄ生）

木村さんのふるさとへの思い、大切な家族への思いが伝わってきた。この学習では福島の現状が知ることができてよかったです。もし自分が木村さんと同じ境遇にあったら、木村さんがしたことはできないです。木村さんの行動はすごい勇気を感じました。防災については、これから非常事態にあわせて、電気、ラジオ、食料が用意できたらいいです。講演を聞いて、防災への意識が高まりました。これからの学習で飯綱町の防災について考えられたらいいです。（Ｅ生）

(2) 防災マップづくり

① 廣内先生講演会「防災マップをつくろう」防災アドバイザーの廣内先生には、地域の方にも、防災マップづくりを中心に防災について講演会を行っていただき、防災マップ作成の意義等をご指導いただいた。

さらには大学生をボランティアとして生徒とともに地域をいっしょに歩いていただいた。

木村さんの写真パネル等の展示（学校祭）

（生徒の感想）

廣内先生の講演会がありました。防災マップのつくり方などを教えてくれました。防災マップも３つのマップからできているそうです。信大の学生も来てくださるということなので、いいマップができるようにしたいです。（Ｆ生）

防災マップをつくるための講演会がありました。ハザードマップと違って防災マップは実際にそこに行ってみて、危険な場所を見つけるのでたいへんだけど、来週の金曜日にあるので、うまくまとめられるようにしたいです。今日はいろいろなことを教えていただきました。（Ｇ生）

② フィールドワーク

１学年生徒 90 名を自分が住んでいる地区を中心に 12 グループに分け、フィールドワークを２回行った。生徒たちはｅコミマップのシステムを利用するために、iPad を持って地域を歩いた。引率は職員だけではすべてのグループを引率することはできないので、地域の方、信州大学の学生、日赤の奉仕団の方にご協力いただき生徒ともに歩いていただいた。時間は５、６校時を設定したが、本校は学区も広く、バスや自転車で登下校する生徒もおり、移動には時間が掛かるため、社会福祉協議会にご協力いただき、移動のためにバスを手配していただいた。

防災アドバイザーの落合鋭充さんには、ｅコミマップを活用するための設定や、校内パソコンや iPad の整備及び不具合への対応をしていただいた。

（生徒の感想）

フィールドワークをしました。僕たち福井団地Ｂのグループは前回 iPad を使えなかったので､急いで見る範囲を周りました。僕が「消火栓を撮ろう！」と言ったら〇〇君が見つけまくって、写真に撮っただけでも 13 枚。撮れなかったけど数えたら全部で 16 個もの消火栓が家の近くにあって驚きました。（Ｈ生）

防災教育で防災マップの発表などをしました。私達が通った通路などを確認したり、危険なところなどを確認したりしました。避難経路を確認していると、結構遠回りを

していることに気づき、びっくりしました。発表ではまとめたことがしっかりと発表できよかったです。次回は、今回いけなかったところをしっかりと調査したり、もう少し詳しく調べたりしてまとめたいと思います。（Ｉ生）

防災教育でみんなといっしょに考えて、コースなどいろいろ決めました。前とは少し違うコースで、いろいろと見つけられるか心配です。でも、「2 回目」なので、しっかり自分で動けるようにしたいのと、水害がありそうなところを見つけ、災害が起こってもしっかり行動できるようにしたいです。（Ｊ生）

防災マップづくりの２回目でした。１回目よりすばやく回れ、時間に余裕があったように感じました。今回は消火器、防火水槽や街灯にも注意して廻れてよかったです。写真や言葉にも注意することができてよかったです。（Ｋ生）

フィールドワークの発表会がありました。どの班もしっかりまとめてあり、「こんな危険性もあったのか！」と気づかされるとてもすごい発表もありました。この学習は地域の危険箇所を探して防災意識を高めるだけでなく、どんな小さな事にも気づく面でもとてもいい学習になりました。（Ｌ生）

５　事業の成果及び今後の課題

(1)　事業の成果

① 総合的な学習の時間の実践を考えたとき、体験的な学習は欠かせない。したがって、その基盤は地域にあり、地域に寄る学習になっていく。中１の段階で防災マップをつくるという視点でフィールドワークを行ったことは、今までの経験にはない視点で地域を見直すこととなり、ICT 等の利用を含め、今後の総合的な学習の基盤になる学習になった。

② 実際に被災された方の講演をお聞きし、さらに防災マップづくりの第一人者である廣内先生の講演をお聞きし、実際に防災マップ作成をさせたことは、生徒たちの防災に関わる意識を大きく向上させることができた。

(2)　今後の課題

① 生徒の防災に関わる意識は高まってきているが、反面我々職員の防災意識は旧態依然で向上は図られていない。今後、生徒の学習の成果や今回の事業を教職員の中で広めていくことで、防災意識を高め、学校全体の防災のあり方を見直す機会にしていきたい。

② 防災マップづくりは今年度だけでは不完全であり、継続的に更新していくことが大切である。今後、この活動を本校の教育課程でどのように位置づけていくか検討していく必要がある。

（　文責　教諭　伊藤秀雄　）